各事業所やフロアーに掲示

永　寿　会

虹の通信　第３２号

２０１９年１０月　　日

特定生物の撲滅作戦から～⁂

♪“夕焼け小焼けの赤とんぼ、追われてみたのはーいつの日か～♪　三木露風の「赤とんぼ」の童謡ですが、秋の風景や秋の夜長を虫たちが音を奏でる季節に入りました。しかし、今全国で赤とんぼと言われているアキアカネが日本自然保護協会の調査でも、今までの千分の一に激減しているそうです。都道府県によってはほとんど見られなくなったりして、絶滅危惧種Ⅰ種か準絶滅危惧種ともなっているとのこと。

藤沢の施設周辺でも初秋の風に乗って僅かな数のアキアカネが飛んでいるのを見かけるだけです。２０年以上前は群れになって飛んでいて、ああ秋だなーと季節の移ろいを感じましたが。

トンボの幼虫ヤゴが住む水田の減少の影響や、農薬の進化で特に、病気予防や除草を目的とする、ネオニコチノイド系農薬や、フィプロニルやイミダクロプリドなど多く使用され始めて変化したそうです。現在の水田には多くの細菌除去、雑草駆除用の農薬が散布されており、労力削減に貢献してきました。私も稲作を行っていますが、出てきた農薬の商品名は何気なく使っているものでした。「あれかー」と思うものです。

昆虫類には多くの種類がありますが、益虫や害虫は人間生活の中で人が区別したもので、随分身勝手だなと虫たちは思っているかもしれません。

また、アキアカネだけでなく、自然界の日本ミツバチにも影響を与え、神経伝達物質であるアセチルコリンの正常な働きを壊し、巣に帰れなくなる事にも関連しているとの報告もあります。私の飼育している日本ミツバチも中々増えません。分蜂ではなく何処かに行ってしまうので、おかしいなと思っていました。私のミツバチの師匠さんもここ数年おかしいと言っていました。

生物の多様性は広く、多く在ればあるほど極端に一部が爆発的に増えたりせず、相互共存し、豊かな自然体系を作って、良好な環境を生み出します。なるべく人間生活に問題を生じさせる虫類はなるべく限定的に駆除するべきだと反省します。私はイラガやチャドクガ等は殺虫剤ではなく、焼却で駆除し、クモやカマキリ、テントウムシ等の益虫に影響のないように努めています。況してや人類に於いては、特定の民族や人種の排斥はあり得ないことでしょう。　　以　上